

楽漢的『孟子』論

「王覇之弁」に着目して

狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

一 はじめに

『孟子』は南宋の朱熹によって「四書」に数えられて敬重された経緯を持つが、その思想の特異性ゆえにしばしば論議の対象となった。孔子の世を去ること百年あまり、群雄が割拠する戦国時代に生を受けた孟子にとって儒教の哲学化は喫緊の課題であった。孔子に私淑しながらも、諸子の一派に過ぎなかった儒学を普及させるためには独自の思想を持って時代に臨んでいくことは疑いない事実である。「自ら反りみて縮くんば、千万人と雖も吾往かん」（公孫丑上）という言葉からは、逆風の中でどのような反論にも強い信念で対峙せんとする気概も窺える。

現行の漢文教材における孟子像はとかく「性善説」の主唱者としての面が色濃く打ち出され、性説をめぐって告子との論争に明け暮れた儒者としての姿が浮かび上がる。本稿は、漢文指導において掘り下げられることの少ない『孟子』「王覇之弁」に着目することによって、「性善説」とは異なる孟子像を考察し、教材としての『孟子』の新たな可能性を提言するものである。

二 『孟子』「王覇之弁」をめぐって

明治・大正期の史家山路愛山が『論語』に「王覇の弁なくして、『孟子』に王覇の弁あり」（『孔子論』）と述べたように、「王覇」の一項は『論語』との分岐点となる。孟子（本名・孟軻）には「人禽之弁」、「義利之弁」、「王覇之弁」のいわゆる三弁があり、その思想を代表するものである。四端を用いて「性善説」を標榜した孟子は単に楽観論に陶醉していたのではない。戦国時代の世相を直視したうえで、「王覇之弁」を提唱した。これは戦国諸侯が邁進する「霸道」を改めさせて、古代の聖帝堯・舜が実践した「王道」を理想に掲げたものである。

孟子曰く「力を以て仁を仮る者は覇たり。覇は必ず大国を有つなり。徳を以て仁を行ふ者は王たり。王は大を待たず、湯は七十里を以てし、文王は百里を以てせり。力を以て人を服する者は心服せしむるに非ざるなり。力贖らざればなり。徳を以て人を服せしむる者は中心より悦びて誠に服せしむるなり（下略）」と。（公孫丑上）

ここでは武力により仁者を装う者を「覇者」、道徳により国を治める者を「王者」と定義する。大国においても力づくでは民衆を心服させることはできない。商（殷）の湯王や周の文王の徳政はもとより無冠の孔子も門弟七十人の信賴を勝ち得た実績は「王道」に通じるものがあつたと説く。孟子は再三にわたり領土の広さに関わりなく、「三代（夏・殷・周）の天下を得るは仁を以てし、其の天下を失へるは不仁を以てせり」と、仁政による人心掌握の必要性を訴える。また、孟子の「王道」論は具体的な施策にまで及ぶ。私田と公田とを分けたうえでその十分の一程度を徴する「井田法」の制度や、人倫を明らかにするための「庠序学校」などの庶民教育機関の建設の必要性にも触れる。物質面「恒産」により精神面「恒心」が保たれ、教育の余地も生まれる図式となるわけである。

君主の制度上の役割について孟子は「王、百姓と樂しみを同じくせば、則ち王たらん」（梁恵王下）、王たる者は民衆と樂しみを共有すべきと述べる一方で、「心を勞する」者（君主）は

「力を劣する」者（民衆）を治めることで彼らに扶養される構造を明示した（滕文公上）。四端の「人に忍びざるの政」（公孫丑上）と気脈を通ずる。憐れみの気持ちで政治をとれば、好き勝手に民衆を虐げることなどできるはずもない。

孟子が活躍した戦国時代には正統王朝たる周が既に有名無実化し、「戦国の七雄」と称される各国諸侯が血みどろの争いを繰り返して勢力の拡大につとめていた。食うか食われるか予断を許さない状況下において、儒家を標榜して諸国を遊説する孟子の立場は実に多難であった。

漠然と「王道」の理想を説くのみでは、現実的に「覇」を唱えんとする諸侯の耳に届かなかつたことも容易に想像がつく。「霸道」を突き進む梁（魏）の恵王にまで向かつて説き続けた《何必曰利（義利之弁）》と《五十歩百歩》の故事からは、王道政治の実態が垣間見える。国学者本居宣長は『玉勝間』において、暗愚な恵王に「王道」を説いた孟子の不見識を批判するが、「人に存する者は眸子より良きは莫し」（離婁上）と言いつけるその目には、恵王の功利的な一面もおそらく鮮明に映っていたことだろう。

強国同士が覇を競い合った時代に諸国を遊説した孟子について、司馬遷は『史記』「孟子荀卿列伝」において「迂遠にして事情に闇し」、「天下方に合従連衡に務め、攻伐を以て賢と為す。而るに孟軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ。是を以て如く所の者合はず」と評したうえで、理想論

のために空回りした実状を伝えている。「霸道」に関心を寄せた諸侯に対して、孟子がひたすら「王道」を説いて敬遠された一連の事情は窺い知れよう。ただし、孟子思想の根幹には「権」の一条がある（離婁上）。男女間では直接手渡さないのが原則だが、嫂が溺れたときには手で助けることも可能であるとした。非常事態においては「権」を承認することとなる。理想とは乖離した時代に生を受けながらも絶望に沈むことなく、常に次善の策（「権道」）を講じて諸侯に説論していた孟子の様子が浮かび上がる。

戦国時代という乱世において、理想に固執するのみでは到達し得ないと悟った柔軟な視点には見るべきところもある。孟子自身が「不仁者」と評した梁の恵王や、燕征伐に下心を覗かせる斉の宣王にまで「王道」を語り聞かせる姿には、弱肉強食の戦国時代の風潮を少しでも改善せんとする彼の現実的な視点があり、広い意味での教育的な配慮があったものと思われる。

三 「湯武放伐論」——江戸期における受容——

『王覇之弁』に関連して『孟子』には、「湯武放伐」なる諸侯が覇権争いを繰り返していた戦国時代に即した論がある。これは君主がその資質に欠けていたとき、臣下が取るべき態度を示したものである。「湯武」とは商（殷）の湯王、周の武王を指し、「放伐」とは暴虐非道の君主の追討を意味する。堯舜禪讓故事については個

人間のやりとりではなく、天意の介在を指摘した孟子ではあるが、「篡奪」という究極な状況の場合にも踏み込んでいく。斉の宣王から「湯武放伐」の事実を尋ねられる場面では、孟子は独自の解釈を交えてこれを是認する。

斉の宣王問ひて曰く「湯、桀を放ち、武王、紂を伐つこと諸有りや」と。孟子対へて曰く「伝に於いて之有り」と。曰く「臣にして其の君を弑して可なるか」と。曰く「仁を賊ふ者、之を賊と謂ひ、義を賊ふ者、之を残と謂ふ。残賊の人、之を一夫と謂ふ。一夫の紂を誅するを聞くも、未だ君を弑するを聞かざるなり」と。（梁恵王下）

宣王の質問意図は明白である。儒家が尊崇する湯武がそれぞれの主君たる桀王、紂王を弑した事実がある以上、自らの「霸道」も認められるところではないかと。すかさず孟子は暴君たる桀紂を単なる「一夫」と断じ、湯武にとつて彼らの主君とは見なされないため、これを討つことも可とした。このあまりに過激な一言は後世にまで波紋を及ぼした。『孟子』は君臣関係（義合）が絶対的ではないことを唱え、究極的には革命の形を取ることを承認したからだ。

この点に関して朱熹は『孟子集注』に「深く斉王を警めて戒を後世に垂るる所以なり」と述べ、王勉の言を引いて「惟だ下に在る者湯武の仁有りて、上に在る者桀紂の暴有らば則ち可なり。然らずんば、是れ未だ篡弑の罪を免れ

ず」との注を施している。あくまで宣王への訓戒の語と解しており、純然たる「湯武の仁」で純然たる「桀紂の暴」を討つ場合のみこれを容認する、およそ現実的にはありえない条件を付加した。この条件により、『孟子』の革命理論が薄められ、「四書」にまで組み込まれた経緯がある。

我が国の近世（江戸時代）において『孟子』の解釈がなされたことについて、井上順理氏『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』、野口武彦氏『王道と革命の間―日本思想と孟子問題』などに詳細な説明がある。両書には、我が国では中世まで特段問題にされなかった『孟子』が、近世に入ると盛んに論議された事例が記される。特に『孟子』を船載した船が転覆するという俗説が広まり、明の謝肇淛の『五雜俎』からは中国にまで伝わっていた様子が窺われる。

倭奴も亦た儒書を重んじ、仏法を信ず。凡そ中国の經書皆重値を以て之を購ふ。独り孟子無しと云ふ。其の書を携へて往く者有らば舟輒ち覆溺す。此れも亦た一奇事なり。

また、上田秋成は『雨月物語』「白峯」（明和五（一七六八）年）において、この伝説について西行法師の口を借りて次のように述べる。

仁を賊み義を賊む、一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと人の伝へに聞き侍る。されば、漢土の書は經典、史

策、詩文にいたるまで渡さざるはなきに、かの孟子の書ばかりいまだ日本に來らず。此書を積みて來たる船は、必ずしも暴風にあひて沈没よしをいへり。

いずれも『孟子』が危険視されていた事実を物語るものである。ただ、江戸の儒者たちにとって『孟子』の「湯武放伐」の一条は様々な解釈を生み出す究極の論題になった。古義学を創始した伊藤仁斎は『孟子古義』（享保五（一七二〇）年）の中で孟子支持を鮮明にし、朱熹の訓戒説に真っ向から反対し、「湯武放伐」を「道なり」、あえて放伐を正道と見なして全面的にこの行為を正当視した。これに対し、荻生徂徠は『弁名』において王霸の別を根本的な問題ではなくて、あくまで「時（時代）」と「位（地位）」の違いに過ぎないと見ている。「湯武放伐」を「名目論」の問題に過ぎないと捉えた伊東藍田は『藍田先生湯武論』（安永三（一七七四）年）に次のように述べている。

湯武は放伐に非ざるなり。湯武は孰れをか謂ふ。成湯周武を謂ふなり。何ぞ放伐に非ずと言ふや。篡弒なればなり。

大義ある「放伐」も実態は「篡弒」に過ぎず、主君誅殺の点では変わらないと指摘した。さらに、中国における王朝変遷は「湯武放伐」の一件にとどまらないと断じたものに冢田大峯の『聖道合語』（天明八（一七八八）年）がある。

湯武の放伐、何の惑ふ所之れ有らん。蓋し

尊卑貴賤、廢興存亡、其の常無き者は固より中夏開闢以來同じく然る所なり。何ぞ独り湯武に惑はん。（中略）此れ帝王の統、皆天命と民心とを以てして未だ必ずしも世系を以てせざるなり。而して天命・民心とは是れ常無ければ、則ち廢興存亡も亦た皆常無きなり。廢興存亡常無ければ、則ち君たるも亦た常無く、臣たるも亦た常無し。

僧侶でもあった大峯は「無常觀」に結びつけながら王朝の交代劇と捉えて解釈した。またさらに幕末になると、吉田松陰が『講孟筭記』を著して孟子思想を日本の現状に照らして講じたが、当時は討幕が間近に迫っていたのである。

若し夫れ征夷大將軍の類は、天朝の命する所に於て、其の職に称ふ者のみ是れに居ることを得。故に征夷をして足利氏の曠職のごとくならしめば、直ちに是れを廢するも可なり。是れ、漢土君師の義と甚だ相類す。然れども湯武のごときは義に依り賊を討ず。命を天に承くと称す。本邦に在りては然らず。

我が国では古来より万世一系たる天皇を拝しているため中華とは内情が異なるものの、現征夷大將軍（徳川政權）に対しては、足利幕府のように統治機能が失われれば、これを討つことも可能であると松陰は述べた。

江戸時代の『孟子』受容をめぐって野口氏は、江戸朱子学が仕掛けた安全弁だったにもかかわらず

らず、幕末に至って徳川幕府が危殆に瀕したとき、放伐否定論によって鍛えられた矛先は皇室そのものではなく、天皇から任命された將軍職に向けられたものと分析する（前掲書）。つまり、易姓革命が実現しなかった日本においても、松陰門下の志士たちが明治維新の原動力になった事実からは、孟子の革命思想の影響を無視することはできないことになるだろう。

江戸の識者にとって「湯武放伐論」は甲論乙駁する格好の材料であった。そのテキストをめぐって、読者に「名目論」や「革命論」の観点から多様な解釈を可能にした事実には留意しておきたいところである。

四 『孟子』における民本思想

ここでは『孟子』の革命思想の根底にある民本思想を取りあげる。前節で触れたように、『孟子』の革命思想は我が国では賛否を持って受容された。本居宣長も激しい批判を加えた一人である。それは「土芥寇讐」の熟語で知られる次の一語をめぐってである。

君の臣を視ること手足のごとくなれば、則ち臣の君を視ること腹心のごとし。君の臣を視ること犬馬のごとくなれば、則ち臣の君を視ること国人のごとし。君の臣を見ること土芥のごとくなれば、則ち臣の君を見ること寇讐のごとし。（離婁下）

君主が臣下を「土芥」のように軽く扱えば、

臣下もまた君主を「寇讐（仇敵）」のように眺めるといった一文には君主専制に自省を促す気持ちが読み取られよう。ただし、宣長は「此一章をもて孟軻が大悪をさとするべし」（『玉勝間』）と憤りをあらわにし、人臣の見るべき書ではないとまで言い放つ。さらに孟子は「君大過有れば則ち諫め、之を反復して聴かれざれば則ち位を易ふ」（万章下）と述べ、臣下による主君の放逐の可能性にも言及していることに注意したい。

このように、孟子思想の中で常に指摘される点はそのあまりにも急進的な民本主義精神だろう。「民を貴しと為し、社稷之に次ぎ、君を軽しと為す。是の故に丘民に得られて天子と為る」・「諸侯の宝は三あり、土地、人民、政事なり。珠玉を宝とする者は、殃必ず身に及ぶ」（尽心下）、繰り返し諸侯は民を重視すべきことを説く。

現行の漢文教材では「性善説」を声高に唱え、「王道」を夢想した孟子像が取りあげられる傾向にある。しかし、その根底には「民本思想」が横たわっていた。上意下達の教訓的なイメージの漢文教材ではあるが、激動の戦国時代において常に民衆の存在を念頭に置いていた孟子像がここではつきりと浮かび上がるはずである。

五 まとめとして

授業において孟子は「亜聖」と称されて、しばしば孔子に準ずる扱いを受けているが、革命思想を盛り込んだ点で両者は一線を画している。

特に、「王覇之弁」に触れることで、「王道」の内実が可視化され、孟子が活躍した戦国の時代背景にも理解が及ぶことにもなる。司馬遷に「迂遠」と評された孟子像も現実的な視点を持った人物へと改まるのが予想される。

「性善説」は漢文の定番教材として有名であるが、孟子思想はそれだけにとどまるものではない。「王覇之弁」に付随する「革命思想」や「民本思想」は、その後の中国における易姓革命の歴史とも有機的につながり、現実面でも多大な影響力を持った。さらに、その思想の特異性から孟子は生前のみならず死後においても、そのテキスト解釈をめぐって論争を巻き起こした事実があつたことは注意したいところである。「性悪説」を唱えた荀子にも「王覇」をめぐる論説があるため、読み比べによりさらに関心が深まることだろう。現在は目にするものの少なかつた「王覇之弁」だが、昭和四十年代には一部の教科書に採録された。単元設定理由として孟子による倫理思想の哲学化と革命思想に触れている（明治書院『改訂漢文（古典乙Ⅰ）』ほか）。孟子は「君子の三楽」の一つに「天下の英才の教育」を掲げているが、激動期においても希望を失わずにタフネスに生き抜いたバイタリティーには見習うべきところも多々ある。「王覇之弁」を教材として取り扱うことにより、常に現実を直視した孟子の人物像が生徒に深く伝わり、その思想への理解も深まることとなる。